

エコフェミニズムの論点とその可能性

—C・マーチャントを手がかりに—

Feminism and the Environment : An Overview of the Issues

山口裕司

環境問題を解決するには人類が積極的な役割を果たさなければならない。それは男女ともにいえる。しかしなかには、特に女性にその役割を期待するイデオロギーがある。エコフェミニズムである。この概念は文字通りエコロジズムとフェミニズムが合体したものが、その内実はいかなるものか。とりわけキャロリン・マーチャントの業績を踏まえながら、エコフェミニズムの考え方を紹介する。彼女のエコフェミニズムの4分類が手がかりになる。リベラル・エコフェミニズム、カルチュラル・エコフェミニズム、ソーシャル・エコフェミニズム、ソーシャリスト・エコフェミニズム。こうした分類を通して、最終的には2つのエコフェミニズムが選択肢として考えられる。①男女の違いを踏まえつつ女性の特性を生かす道、②男女の二元論を超越しつつ男女がともに解放される環境政治を標榜する道。筆者は段階論でいえばまず①を実施し、その成果を生かす形で②を目指す方が自然であろうと考える。

キーワード：エコフェミニズム、マーチャント、環境問題、女性の地位向上、イデオロギー

目次

- I はじめに
- II エコフェミニズム概念
 - 1 一般的定義
 - 2 マーチャントの見解
- III エコフェミニズムの論点とその可能性
 - 1 エコフェミニズムの論点
 - 2 エコフェミニズムの可能性
- IV おわりに

I はじめに

政治イデオロギー関連の文献を読むと20世紀後半に台頭してきたイデオロギーとしてエコロジズムとフェミニズムが挙げられている⁽¹⁾。両者ともに21世紀の重要なイデオロギーでもある。さらに両者が合体したものとしてエコフェミニズム (ecofeminism) が存在する。ヘイウッドによれば、エコロジズム、フェミニズム、ナショナリズムは横断的なイデオロギーであり、他のイズムと共鳴しやすい⁽²⁾。したがってエコロジズムも容易にフェミニズムと連動する。

さて、本稿ではこのエコフェミニズム (エコロジカル・フェミニズム) の概念を検討する。これは1974年にフランスのフランソワーズ・ドゥボンヌが命名した用語である。世界各地で起こっていた女性たちによるさまざまな環境運動と新しい社会倫理の追求を説明する概念として登場した。そしてこの概念は人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係、女性と男性の関係を求める思想として、具体的な運動や活動を基盤に、アメリカにおいてさらに発展した⁽³⁾。

現在の日本環境政治は欧米に比較して、決して先進的ではない。特に環境政党 (緑の党) は日本に存在しない。欧米のほとんどの諸国で環境政党が活躍している。典型例はドイツである。ドイツの90年連合・緑の党は1998年よりドイツ社民党と連立政権を樹立し、2002年の総選挙でも勝利を収め、あと4年間与党の座を維持することとなった。このドイツ緑の党の党是はエコロジーとフェミニズムである。

東西冷戦構造の崩壊後、日本でも従来のイデオロギー対立は弱まり、自民党と社会党が連立を組むまでになった。自民党も社会党 (現社民党) も主義主張にそれほど違いのない時代が到来している。そうしたなかで、新たな政党間の対立軸が要請されているのではないだろうか。日本の政党システムのわかりにくさはそうした各政党の特色のなさから来ている。どの政党も自由主義や民主主義を標榜し福祉政策を重視する。そうしたなかで時代のニーズに合った政党の旗印を探すならば、それはエコロジズムとフェミニズムではないか。

ちなみに、エコフェミニズムの形成に影響を与えたのが、1960年代から70年代にかけて、いわゆる新しい社会運動のなかで登場してきたエコロジー思想とフェミニズム思想である⁽⁴⁾。

こうした展望のもと、本稿では両イデオロギーの合体したエコフェミニズムの日本への定着の可能性を探るべく、同概念の論点とその可能性を解明したい。環境問題を改善するうえで女性の役割は大きいと思われる。では本当の意味で、女性は男性より環境問題にセンシブルなのか。もしそうであるならば、エコフェミニズム論はどの程度それを裏付けているのか。将来の日本の環境政治における女性の活躍の可能性を探る意味からも、エコフェミニズムを理論的に把握しておきたい。

本稿ではまずエコフェミニズムの一般的定義を述べた後、同概念の確立者であるC・マーチャントの整理を活用し、エコフェミニズムとは何かを筆者なりに要約したい。次にエコフェミニズ

ム概念にはどのような論点と可能性があるのかを明らかにしておきたい。このイデオロギーは本当に役に立つのかどうか。そしてこれを役立てるにはどのような課題が残されているのか。こうしたテーマを念頭に本稿をまとめたい。

Ⅱ エコフェミニズム概念

1 一般的定義

エコフェミニズムの一般的定義を紹介したい。ただしこの定義においてもマーチャントの研究に負うところ大である。「エコフェミニズムという用語は、1974年、環境革命を先導する女性たちに呼びかけた、フランソワーズ・ドゥボンヌによって命名されたものである。エコフェミニストたちは、新しいホリスティック哲学の見地に立って、自然汚染や資源の管理について改良主義的で漸進的な政策を拒絶する『ディープエコロジー』の見解をここでは放棄したが、他の生物の上位に人間を置かず、『自然のなかにある人間を取り巻く相互性』を変えようとするラディカル・エコロジーとは見解を共有した」⁽⁵⁾。

2 マーチャントの見解

では、エコフェミニズム概念を検討するうえで不可欠の論者であるキャロリン・マーチャント (Carolyn Merchant) の見解をみてみよう⁽⁶⁾。

リベラル・フェミニズム、カルチュラル・フェミニズム、ソーシャル・フェミニズム、ソーシャリスト・フェミニズムはすべて、自然と人間の関係性の改善に関心を持ち、各々のフェミニズムが違った仕方でもエコフェミニズムの観点の確立に寄与してきた (表1「フェミニズムと環境」)。リベラル・フェミニズムは改革的環境主義 (reform environmentalism) の目指すところと一致し、自然と人間の関係を現存統治機構の内部から新しい法律や規制を成立させることによって変えようとする。カルチュラル・エコフェミニズムは家父長制に対する批判に基づいて環境問題を分析し、女性と自然の両者を解放することの可能な、現存体制に取って代わりうる社会像を提示する。

ソーシャル・エコフェミニズムとソーシャリスト・エコフェミニズムは、資本主義的な家父長制を分析の出発点にする。両者は、再生産の家父長制的諸関係がいかに男性による女性の支配を表しているか、そして生産の資本主義的な諸関係がいかに男性 (人間) による自然の支配を示しているかを問題にする。女性と自然の両者を資源として利用する市場経済に内在的な、女性と自然に対する支配はエコロジカルな革命によって全面的に改変されるという。カルチュラル・エコフェミニズムは女性と自然の結びつきの研究に専心してきたが、ソーシャル・エコフェミニズムとソーシャリスト・エコフェミニズムは支配に対するより徹底的な批判と解放的な社会正義を可能にする力がある。

表1 フェミニズムと環境

	自 然	人 間 の 本 性	既存の環境主義に対する フェミニズムの批判	フェミニズムの 環境主義のイメージ
リベラル・ フェミニズム	原子 精神/身体の二元論 自然に対する支配	合理的行為主体 個人主義 自己利害の最大化	「男性・人間とその環 境」は女性を忘れ見落 としている	自然資源と環境に関わ る科学に女性が従事す る
マルクス主義 フェミニズム	人間の利用のために科 学と技術によって作り 変える 人間の自由のための手 段としての自然支配 自然は生活（食料、衣 料、住居、エネルギー） の物質的基盤	生産様式、実践を通じ た人間の本性の創造 歴史的に異なる—固定 されたものでない— 人間の種の本性	資本家による資源管理 と財と利潤の蓄積に対 する批判	社会主義社会はすべて の人々の利益のために 資源を利用するだろう 資源は労働者によって 管理されるだろう 余剰が生み出されない だろうから環境汚染は 最小になるだろう 男性と女性の両者によ る環境に関する研究
カルチュラル・ フェミニズム	自然は精神的・宗教的 で個人的・人格的 従来の科学と技術は支 配を強調するがゆえに 問題あり	生物学的特徴が基盤 人間は性的で生殖を行 う身体 生物学的特徴により性 的差異を持ち、社会に より性別役割を持つ	〔環境主義は〕男性の 自然支配と女性支配の 結びつきに無自覚 男性の環境主義は位階 制を維持している 女性の生殖への（化学 的な、核戦争の）環境 上の脅威に対する注意 が不十分	女性と自然両者の価値 が高められ祝福される 生殖の自由 女性と自然に対するポ ルノグラフィックな描 写に反対 カルチュラル・エコフェ ミニズム
ソーシャリスト・ フェミニズム	自然は生活（食料、衣 料、住居、エネルギー） の物質的基盤 自然は社会的、歴史的 に構成される 自然は生産と再生産に より作り変えられる	人間の本性は生物学的 特徴と実践（性、人種、 階級、年齢）により創 造される 歴史的に異なり、社会 的に構成される	〔環境主義は〕自然が 能動的で応答的である ことを見落としている 女性の生産と再生産の 役割が〔社会的に構成 された〕カテゴリーで あることを見落として いる システムアプローチは 機械論的であり弁証法 的ではない	自然の生産も人間の生 産もともに能動的 生物学的再生産と社会 的再生産の重要性 生産と再生産の弁証法 多数のレベルでの構造 分析 （機械的でなく）弁証 法的なシステム ソーシャリスト・エコ フェミニズム

〔出所〕 Carolyn Merchant, *Radical Ecology*, Routledge, 1992, pp.186-187

川本・須藤・水谷訳『ラディカルエコロジー』産業図書、1994年、252～253ページ

〈リベラル・エコフェミニズム (liberal ecofeminism)〉

リベラル・エコフェミニストにとって、環境問題は自然資源の急速な開発と農業などの環境汚染物質を規制することの失敗から生じる。社会秩序が統治機構と法律によって再生産される方法は社会的再生産が環境的観点において健全化されれば改善される。それゆえ、科学、保全、法律が資源問題を解決するのにふさわしいアプローチである。科学者、自然資源の管理者、規制担当者、弁護士、立法家になるための教育の機会が平等に与えられているならば、女性は男性と

同様、環境の改善、自然資源の保全、そして人間生活の質的向上に寄与することができる。したがって女性は、自分たちの生物学的特徴のゆえに押しつけられた社会的烙印・差別を超越し、環境保全の文化的プロジェクトに男性とともに携わることができる。

〈カルチュラル・エコフェミニズム (cultural ecofeminism)〉

男性に対立するものとしての女性はその生理学的特徴、社会的役割、心理学的特徴のために、自然により近いと見なされてきた。生理学的には、女性は自分の体から生命を生み出し、そして育児に伴う喜びと苦痛、さらに特有な経験をする。これに対して男性の生理学的特徴は、自由に旅をし、狩りをし、戦争を遂行し、公務に従事することである。社会的には子供を育て、家族の世話をすることが、結婚した女性を家庭にとどまらせ、職場から遠ざけてきた。心理学的に女性は、感情に動かされやすい性質を持っており、特定のもの、個人的な事柄、現在の事柄に強い関心を持つと見なされてきたが、男性は理性的、客観的であり、抽象的な思考能力を有していると思われる。

女性は自然の創造物で男性は文化のそれである。自然破壊と男女不平等は文化的男性が自然的女性を支配するのと同じ過程に組み込まれている⁽⁷⁾。

カルチュラル・エコフェミニストにとって、このディレンマから脱出する方法は、直接的な政治行動によって女性と自然の地位を高め、解放することである。反科学、反技術の観点から、カルチュラル・エコフェミニストは女神崇拜、月、動物、女性の生殖器官を中心とした古代の儀礼を復活させることにより、女性と自然の関係性を讃える。自然が母として女神として重んじられる観点は、多くのエコフェミニストにとってインスピレーションと励ましの源である。カルチュラル・エコフェミニストの哲学は、直観、配慮の倫理、自然と人間の密接な関係を重視する。

〈ソーシャル・エコフェミニズム (social ecofeminism)〉

ソーシャル・エコフェミニズムは、社会を分権化された、人間的なコミュニティとして作り変えることを構想する。宗教性を重視するカルチュラル・エコフェミニズムは、女性と自然との間の特別な歴史的関係を認め、両者を同時に解放したいと願うが、ソーシャル・エコフェミニズムはカルチュラル・エコフェミニズムと違う。ソーシャル・エコフェミニズムの出発点は、初期のラディカル・フェミニズムが持っていた唯物論およびソーシャル・フェミニズムに立脚した分析にある。これは女性に対して結婚、核家族、恋愛、資本主義そして家父長的宗教によって抑圧が課せられている状態を作り変えることを目指す。ソーシャル・エコフェミニズムは経済的・社会的なヒエラルキーを打倒することによって女性を解放すると主張する。ソーシャル・エコフェミニズムは男性と女性の生殖能力の違いを認める。しかしこれらの事実が性的なヒエラルキーと支配とを必然的に伴うという観念を退ける。ソーシャル・エコフェミニズムは女性の生殖の自由、知的自由、性欲の自由、道徳的自由を擁護する。

ソーシャル・エコフェミニズムは、マレイ・ブクチン (Murray Bookchin) のソーシャル・エコロジーに依拠している。ソーシャル・エコロジーでは、人間と人間の関係、人間と自然の関係

の二つの関係が相互に関連しているものと理解され、社会的抑圧や差別といった社会的不公正が環境破壊と密接に結びついていると強調される。この点がアルネ・ネスが提唱したディープ・エコロジーとは異なっている。ソーシャル・エコロジーもディープ・エコロジーも人間と自然との新しい関係性の構築が必要だという点では共通しているが、ディープ・エコロジーにおいては人間と自然の関係ばかりが取り上げられ、人間と人間の関係、すなわち人間社会における抑圧や差別の問題はそれほど関心が払われていない。マーチャントの基本的な枠組みは、一見、ソーシャル・エコロジーに大変近いものに思える。しかし、ラディカルエコロジーで注目されるのは、そのようなソーシャル・エコロジーにおいて弱かった「住みよい世界」を構築していく社会運動にとって必要な道筋、すなわち「自然と人間を大切に育成する新しい倫理」を示そうとしている点である。そこではブクチンにおいては弱かった、ジェンダーからの視点、女性と環境との関わりが強調されている⁽⁸⁾。

また、主要なエコロジー問題は社会問題にその根本原因があるということを強調するためにソーシャル・エコロジーと名付けられた。その社会問題とは、父権主義的文化そのものの成立にまでさかのぼれる。「エコ・フェミニズムも無政府主義と密接な関係にある。この潮流はとくにキャロリン・マーチャントなどの影響が強いアメリカにみることができる。父権的支配は地球環境の破壊、汚染と表裏の関係にあるが、女性には自然や地球への関心がそなわっている」とされる⁽⁹⁾。

競争原理、資本の蓄積、限度のない成長を基礎に置く生活の法則を伴った資本主義の発生は、エコロジカルな問題と社会的な問題を激化させた。実際、その深刻さはいままでの人類の発展の歴史の中で前例のないものである。資本主義社会は有機的世界をますます生命のない無機的な商品の集合へと転換することによって、生物圏を単純化する運命にあった。そのために長い間かかって分化と多様性に向けて進められてきた自然の進化の性質と対立することになった。このような傾向を逆転させるためには、資本主義は、ヒエラルキーのない関係性、分権化された地域社会、ソーラーパワーなどのエコ・テクノロジー、有機農業そして等身大の産業に基づいたエコロジカルな社会によってとって代わらなければならない⁽¹⁰⁾。

〈ソーシャリスト・エコフェミニズム (socialist ecofeminism)〉

ソーシャリスト・エコフェミニズムは生産よりも再生産のカテゴリーを公正で持続可能な世界の概念の中心に据えている。マルクス主義的フェミニストと同様、ソーシャリスト・エコフェミニズムは人間以外の自然を全生活の物質的基盤と考え、衣食住およびエネルギーは人間の生活を維持するのに必要不可欠であると考え。自然と人間の自然(本性)は長い時間をかけて社会的・歴史的に作られ、人間の実践によって作り変えられる。自然は能動的主体であり、受動的な支配の対象ではない。そして人間は、自然との間に持続可能な関係を作り出し発展させなければならない。ソーシャリスト・エコフェミニズムは、資本主義的家父長制を批判する点でカルチュラル・エコフェミニズムを越え、生産と再生産、生産とエコロジーの間の弁証法的対立関係に注

目する。ソーシャリスト・エコフェミニズムの全体的視野から社会的でエコロジカルな変化を分析し、生の持続可能性と公正な社会に通じる社会的行動を提案する立脚点が与えられる。

Ⅲ エコフェミニズムの論点とその可能性

1 エコフェミニズムの論点

科学革命以降、女性や自然は、男性や文化よりも劣るものだと見られてきた。女性と自然は似通った性質を有し、これらの性質は、男性と文化が有するものに比べて価値が低いといわれるのである。エコロジー運動は、口のきけない従属的な存在としての自然という観念に疑問を呈してきた。同様にフェミニストは、女性と自然との関係を貶めるのではなく祝福しようとしてきた。このことはエコロジー派を心優しさと育みの女性的原理に導き、それによって生きるべきという主張も生まれた。他方では、フェミニストをエコフェミニズムへと導くことになる。マーチャントの『自然の死 (The Death of Nature)』はこうした議論の中心にある。彼女は女性運動とエコロジー運動の共通の関心、自然の文化への従属と女性の男性への従属との関連を説明し、大地が生命をもつ母として見られるならば、鉦夫は母殺しの告発を受けるだろうと述べる⁽¹¹⁾。

〈第三のフェミニズムか〉女性と自然の関係をどのように理解するかという点からフェミニズムをみると、①女性と自然の一体化を否定するフェミニズム、②女性と自然の一体化を認め女性なるものを再評価するフェミニズム、の2つに分類することができる。しかし①の立場を代表するリベラル・フェミニズムについては、女性と自然の関係を断ち切り、男性的価値、資本主義社会の容認のなかで、男性にキャッチ・アップすることに男女平等を求めるために、結果的に自然破壊に加担することになるという批判がある。②を代表するものにはカルチュラル・エコフェミニズムがある。カルチュラル・フェミニズムはこれまでの社会で抑圧されてきた女性の産む機能、感性、直観など、従来女性的なるものと否定的にとられてきた能力を、逆に積極的に肯定するラディカル・フェミニズムの流れを汲んでいる。そしてラディカル・エコロジーよりもさらに女性原理を強調し、女性原理の復権により女性解放を目指すフェミニズムである。そして女性は男性よりも自然に近いという立場をとり、とくに、初期アメリカのエコフェミニズムに大きな影響を与えた。ただ、1970年代以降の潮流を特徴づけるこれらのフェミニズムは、女性と自然の関係を取り上げながら、女性は男性よりも自然に近いという考えを自明のこととし、男性／女性、文化／自然といったヒエラルキー的二元論的思考に陥り、女性の抑圧と自然の抑圧との関係については明確な理論付けをしてこなかった。ここに「第三のフェミニズム」として、エコフェミニズムという独自の新しいフェミニズムを構築しなければならない必然性が生じた⁽¹²⁾。

1960年代から70年代にかけて、先進諸国でフェミニズムの運動が同時多発的に起きた。これを第二のフェミニズムと呼ぶが、そこではラディカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズムなどが新たな展開をとげた。1970年代は、フェミニズムの歴史のなかでも、特に大きな達成がな

された時代であった。女性によって担われた70年代フェミニズムは、80年代に入って、科学史、心理学、文化人類学などの様々な領域に決定的な影響を与え始める。そのようなフェミニズムの影響力は、エコロジーにも及んだ。エコフェミニズム（エコロジカル・フェミニズム）である。それまでのエコロジー運動や思想は男性によって作り上げられたものであり、この社会を規定している女性支配の構造をそのまま反映する形になっている。したがって男性のいう通りにエコロジー運動を進めていっても、女性支配の構造は解消されない。そもそも人間による自然支配の構造と、男性による女性支配の構造は同根とされる。男性社会が作り上げた、この支配の構造それ自体を解消しないかぎり、環境問題も女性支配もなくならないと⁽¹³⁾。

このようにエコフェミニズムは第三のフェミニズムとして位置づけられるのかどうか一つの論点になるだろう。

〈女性解放運動のイデオロギーか〉 奴隷解放とそれより新しい公民権運動が、動物解放主義者にとって、もっとも注目すべき歴史的先例であるとすれば、より広範な環境倫理の提唱者にとって、とくに勇気づけられるのが女性解放運動である。その理由は女性に対する搾取と自然破壊の搾取の類似性にある。「女性の憎しみと自然の憎しみには密接な関係があり、互いに補強し合っている」と述べたのはアイネストラ・キングである。このアナロジーの中心となるのは、自然環境のイメージを慈しみ深く受動的な存在である女性になぞらえるところである。また女性と自然にとっての脅威は、伝統的な男性支配と家長制度とくに男性の性差別主義者である。またキャロリン・マーチャントはこの自然と女性の関連性について掘り下げ、その著『自然の死』の第1章を「女性としての自然」と題した。そして歴史を振り返り、自然界に対する慈しみ深い母のイメージによって、長い間、人間は本能的欲望を抑えてきたが、17世紀になって自然を野生的で奔放な脅威あるものとして考えるようになった。やがて自然を支配しようとする運動が高まり、科学技術革命が支配の欲望を促進したとされる⁽¹⁴⁾。

20世紀がどんな時代であったかを考えるとき、日本だけでなく世界的に、女性にとって劇的な変化の世紀であったとの一項は欠かせない。その変動はいまも進行中である。世紀の初め、当時の呼び方に従うと婦人運動は、まだ微弱な域に止まっていた。男性本位の価値基準が、社会の常識に近かった。それはほとんど空気のように両性を捉えていて、男性本位と意識されること自体、少なかった⁽¹⁵⁾。

エコフェミニズムはエコロジー運動とフェミニスト運動の双方に影響を及ぼしはじめている。エコフェミニズムの目的は主流の自由主義的女権拡張運動の目的と同じではない。エコフェミニストは男性との同権を追求するのではない。女性の解放は女性としての女性のための解放を意味する。エコフェミニストは女性であることに必然的に伴うものについて独特の理解をしている。エコフェミニストはまた、女性の解放は伝統的に女性と結びついている活動や活動場所（出産、子育て、家庭）の積極的再評価が必要と考える。こうした考えのために、他のフェミニストはエコフェミニストのプロジェクトに躊躇する。それは女性を抑圧するために利用されるステレオタ

イブを強めるものだと。カナダのエコフェミニストであるジュディス・プラントは主要な原理を述べている。女性の自然との親密さ、女性に対する支配と自然の略奪には同根の原因すなわち家父長制がある、自然を表すには機械的メタファーではなく有機的メタファーが必要である、という原理である⁽¹⁶⁾。

以上のように、エコフェミニズムは女性解放のイデオロギーなのかという論点がある。

〈エコとフェミの共通点は何か〉女性と自然が古くからつながりを持ち、その結びつきは、文化・言語・歴史を通じて持続されてきた。長い歴史をもつ両者のあいだの相互関連は、近年、時を同じくして登場したふたつの社会運動によってはっきりと浮き彫りになった。ひとつは草創期に論議を呼んだベティ・フリーダンの『女性の神秘』(1963年)に象徴される女性解放運動であり、もうひとつは1960年代に形成され、1970年のアース・デイで最終的に全国民の関心を獲得したエコロジー運動である。両者に共通するのは、「平等主義的な視点」である。女性は、これまで男性に服従するようしばりつけてきたアメリカ社会の文化的・経済的抑圧からみずからを解放しようと闘っている。環境保護運動家たちは、たえまなく環境を食い荒らしつづけることによって生じる取り返しのつかない結果に警鐘を鳴らし、人間と自然の密接な相互依存関係を重視する生態学的倫理というべきものを発展させつつある⁽¹⁷⁾。

女性運動もエコロジー運動もともに、市場経済が自然と社会の双方に競争・攻撃性・支配といった犠牲を強いることに対して、きびしい批判を加える。生態学は、資本主義・技術・進歩といった概念と結びついた無制限な成長がもたらす帰結に対する批判において、破壊的な力をもつ科学である。エコロジー運動の理想は、工業化と人口過密によって乱された自然の平衡を回復することであった。それは資源を食い荒らし、ひたすら進歩を求めるという直線的な思考に反対し、自然のサイクルのなかで生きることの必要性を強調してきた。また進歩を求めるという直線的な思考に反対し、自然のサイクルのなかで生きることの必要性を強調してきた。また進歩の代償、成長の限界、技術政策における意志決定の欠如、天然資源の保護と再利用の緊急性などをも力説した。同じように女性運動は、市場経済における競争の中で全人類が支払わなければならない代償、初期資本主義社会における女性の生産経済上の実質的な役割の喪失、そして悩める企業家亭主たちにとって、女性と自然が「心理的・リクレーション的な資源」となっているという見方などを暴露した⁽¹⁸⁾。

このようにエコロジーとフェミニズムがアナロジーで語られる場合、両者にどのような共通点が存在するのかが論点となる。

〈リプロダクティブ・ヘルスとは何か〉エコロジーとフェミニズムの二つの思想が結び合ったり、重複したり、影響し合ったりしながら、新たな潮流を生み出している。その両者の結び目に横たわるのが新しい健康概念としてのリプロダクティブ・ヘルス (reproductive health) である⁽¹⁹⁾。

性と生殖に関する健康・権利を提起する女性たちの活動と、グローバルな環境危機の克服、

男性中心の開発主義の見直し、女性差別の解消や女性の地位向上への取り組みが、エコロジーやフェミニズムの視点から結びつけられ、女性の自己決定権を確立する世界的運動のうねりとなりつつある。これまで生命を育み、環境問題をリードしてきたのは女性であったが、とりわけ、第三世界の女性は、森林破壊、砂漠化、農薬汚染、有害物質の投棄などの環境破壊と闘い、地球規模のエコロジー運動の基盤を形成してきた。人口爆発が続く開発途上国では国家（男性）主導の家族計画下で避妊や不妊手術・中絶が強制され、多くの女性が妊娠・出産による合併症で死亡する、胎児の性別判断による女児の中絶・遺棄が増加するなど、女性や女児の人権と健康が脅かされてきた。性と生殖に関する健康／権利の保障は、エコロジーの復権と環境・女性・人口問題解決のための基本要件といってよい⁽²⁰⁾。

ここでリプロダクティブ・ヘルズ概念はエコフェミニズムを語るうえでどのように位置づけられるのかという論点が浮上する。

これまでの論点を踏まえつつ、表2(エコフェミニズムの位置)を見ると、他の立場との違いが鮮明となるのではないか。エコフェミニズムは問題の所在、主要ターゲット、社会変革の方法、理想像が他のラディカルな立場と比較してこのような違いを見せる。

表2 エコフェミニズムの位置

	問題の所在	主要ターゲット	社会変革の方法	理想像
エコマルキスト	資本主義	生産力	階級闘争	社会主義
エコソーシャリスト	個人主義	経済力	政治的変革	コミュニタリアニズム
緑の人々 (一般の緑の運動は含まない)	産業発展	国家政策	エコロジー的理解	持続可能性
ディープエコロジスト	人間中心主義	世界の認識	一体感の拡大	生命中心主義
ソーシャルエコロジスト	ヒエラルキー	制度力	社会的組織	アナーキズム
エコフェミニズム	権力パラダイム (男性中心主義・ヒエラルキー的の二元論)	家父長制 (性心理的動機・組織力)	男性と権力の切離し・ フェミニズム原理に 基づく社会的再構想	権力の超越

[出所] Greta Gaard (ed.), *Ecofeminism*, Temple UP, 1993, p.31

2 エコフェミニズムの可能性

では、エコフェミニズムは将来思想ないしイデオロギーとして、どのような可能性を秘めているのだろうか。とくにその担い手と考えられる女性との関係を踏まえて検討してみよう。その前に次の文章を引用しておきたい⁽²¹⁾。

「女性の苦しみは普遍的である。したがって自分たちの苦しみのおかげで他の生物の苦しみも

わかる。たとえば、人種、子供、動植物、岩石、水、空気など。エコフェミニストの要求は自分たちのためだけではない。女性たちの男性からの解放は地球全体を元気にする」。

〈環境運動の支柱〉戦後日本の女性の運動で誇れるのは平和運動と環境運動である。全国の公害反対運動を女性が行った。企業の中で内部告発をしたのも新潟水俣病の昭和電工のように女性だった。セメント工場建設を阻止しようと冷たい冬の海に飛び込んでなわで体を縛り合って測量船に抵抗した大分県臼杵の女性の闘いもある。女性のパワーは地域の政治まで変えて革新自治体を各地に誕生させた。その後の反原発運動での女性の役割も決定的だった⁽²²⁾。

欧米の場合、西欧技術文明の行き着いた先が核文明だという批判が強い。スリーマイル原発事故やチェルノブイリなどが影響してエコフェミニズムが盛んになり名著が次々に出た。たとえば、反軍反核の行動を起こした米国のイネストラ・キングの「エコフェミニズムとは？」という小冊子がある。「自然は人間がいなくてもよいが、人間は自然なくしては生きられない」と女性の体への暴力と自然への暴力である核文明と軍事的文化に反対しているのがキングである⁽²³⁾。

女性が反原子力運動の新たな担い手として登場してきた第一の背景は、市民運動・住民運動一般や選挙政治一般における、高学歴化などともなう女性の政治的関心の高まりと、政治的主体としての自覚である。第二に女性の政治的社会的関心の高まりは、女性に男性とは独自の政治的意思決定をうながし、ジェンダー・ギャップを顕在化させている。そしてとくに原子力問題に関しては、このジェンダー・ギャップが顕著である。1988年9月の朝日新聞社の全国世論調査では、原子力発電の推進に賛成する者は、男性の38%に対して、女性は21%と男性の約半分にとどまっており、反対は、男性の41%に対して、女性は51%と過半数を超えている。87年8・9月に行われた総理府の原子力に関する世論調査でも、原子力発電を増やしていく方がよいとする男性は67%であるのに対し、女性は47%にとどまっている。原子力発電については、運動に関与すると否とを問わず、女性の方が不安感・危機感が一般的に強いのである。この原子力に関するジェンダー・ギャップは世界的な傾向である⁽²⁴⁾。

〈文化革命〉1960年代から70年代にかけて世界を風靡したウーマン・リブとよばれた女性解放運動には、個の感性から出発して、運動の回路を通じて体制変革をめざす「文化革命」的指向が内在していた。そしてこの流れは、1980年のデンマークで、エコ・フェミ宣言という形で出現している。無名の女性たちが起草し、国際会議に集まった世界の女性たちに配ったビラである。ここにははっきりと、第三世界および自然と女性を搾取してきた産業社会への批判と、自分自身の生き方を変えることで脱近代を模索しようという女性たちの意志が表現されている。1990年代、エコフェミニズムは、欧米で大きな力を持った。環境破壊がいっそう深刻化し、人工生殖技術の急速な展開による女性の身体からの疎外が進む中で、これらに歯止めをかけ、新しい未来を指向する論理は、エコロジーとフェミニズムの両方を踏まえたところからしか生まれえないからである⁽²⁵⁾。

われわれが回復しなければならないのは、自然界のエコロジーであるとともに精神のエコロ

ジーでもある。そしてそれをつなぐものが、みずからの身体性であり感性である。それゆえ身体性にめざめることは、男性にとっても女性にとっても、自己のうちなる女性原理との出会いにほかならない。この地点に立ってはいじめて、エコロジカル・フェミニズムが、フェミニズムを安易に日常性に矮小化するものでも、また単にこの社会での女性の特性を主張するものでもないことが理解される。それは男性原理のみで塗りかためられた現代のコンクリート・ジャングルに、女性原理によって突破口を開こうとする文化革命の一つである⁽²⁶⁾。

Ⅳ おわりに

これまでの議論を整理するために、ダブスの「エコフェミニズム」の整理を紹介したい。彼は ディファレンス・エコフェミニズム (difference ecofeminism) とディコンストラクティブ・エコフェミニズム (deconstructive ecofeminism) の二つに分類している⁽²⁷⁾。前者は女性と男性の違いを踏まえていわゆる女性の特性を再評価する立場で、後者は男女の二元論を超越して男女がともに解放される環境政治を標榜する立場である。既述のカルチュラル・フェミニズムが前者に近く、リベラル・フェミニズムが後者に近い。

プラムウッドは西欧の合理性重視の文化は、これが自然を下位に置いている限り、自然に依存するという認識が生まれえない。こうした合理性崇拜の文化が支配的であることによって、人類の生き残りに暗雲が漂う。我々の未来はひとえに、二元論(たとえば理性/自然)を超越して真に民主的でエコロジカルな文化を創造できるか否かにかかっていると述べる⁽²⁸⁾。

エコ・フェミニズムの問題提起に対して、エコ・フェミ自身の答えは十分でない。文明観の変革をフェミニズムに組み入れようとする点は評価できるし、身体性という概念も解放の有力な戦力となりうると思われるが、具体的な問題に対して、原理的な対応に終始している。エコロジーとフェミニズムとを「女性=産む性=自然」を手がかりに、女性の身体性によって必然的に結びつけようとする議論だけでは、エコロジーの危機をフェミニズム理論に取り込むことはできないかもしれない⁽²⁹⁾。

古来の強力な女性のエコロジー感覚を呼び覚まし、自然と生命との協力を人類が再びいかに図ることができるかを考えなければならない⁽³⁰⁾。またエコフェミニズムの倫理や文化を広めることでエコフェミニズムを実現していく必要がある⁽³¹⁾。

男性主導で進められてきた生産性ないし効率優先の近代産業社会が、地球環境の危機を生み出しているという視点から、自然との共生を主張するエコロジカル・フェミニズムの視点が登場した。男性主導の近代産業社会は、自然を支配の対象とし、つねにそれをコントロールしようとしてきた。その一方で、自然のなかで営まれる人間の最も基本的な生活の領域については、ほとんど関心を払ってこなかった。現在問われているのは、人間の基本的な生活の回復と、それと結びついた自然との共生であるとエコロジカル・フェミニズムは訴える⁽³²⁾。

環境問題を改善する上で政治の役割は大きいのだが、その割にはまだまだ経済重視路線であり、今後の環境重視政策（政治）が望まれる⁽³³⁾。

長年、原子力問題と取り組んできた高木仁三郎は、インタビューに答えて次のように述べている。「違う土俵でやらなければと会社をやめてしまって、大学へもどって助教授をやっている、原子力学会などに批判派として出席していた。その時会場を見渡せば、99%が男性。黒い背広だけの異様な光景で、何という人たちだと思った。世の中半分は女性なのに、純粹培養されたこういう男性たちだけで原子力をやっている。論理がおかしくなる。こういうことには土俵から出てみないと気がつかなかったと思う。つまり原子力自身の土俵が父権的で男性中心的だということ。だからエコロジカル・フェミニズムに共感する」⁽³⁴⁾。

男女共同参画社会を目指す日本にとって、真の男女共同は、高木が指摘するように、環境政策の分野でも必要なことではないか。そのためにもエコフェミニズムの概念はひとつの思想的支柱となりうる。

【注】

- (1) Andrew Heywood, *Political Ideologies. An Introduction*, Second Edition, Macmillan Press, 1998, pp. 238-290
- (2) *Ibid.*, p. 283
- (3) 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波女性学事典』岩波書店、2002年、44頁
- (4) 長谷川公一編『環境運動と政策のダイナミズム』有斐閣、2001年、41頁
- (5) ソニア・アンダマルほか著（奥田暁子監訳）『現代フェミニズム思想辞典』明石書店、2000年、90頁
- (6) Carolyn Merchant, *Radical Ecology. The Search for a Livable World*, Routledge, 1992, pp. 184-196. キャロリン・マーチャント（川本隆史・須藤自由児・水谷広訳）『ラディカル・エコロジー —住みよい世界を求めて—』産業図書、1994年、250～267頁
- (7) Heywood, *op. cit.*, p. 289
- (8) 江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』平凡社、2002年、415～416頁
- (9) Andrew Vincent, *Modern Political Ideologies*, second edition, Blackwell, 1995, p. 181. アンドルー・ヴィンセント（重森臣広訳）『現代の政治イデオロギー』昭和堂、1998年、245頁
- (10) 江原・金井編、前掲書、205頁
- (11) Andrew Dobson(ed.), *The Green Reader*, 1991. A・ドブソン編著（松尾眞・金克美・中尾ハジメ訳）『原典で読み解く環境思想入門 —グリーン・リーダー—』ミネルヴァ書房、1999年、277頁
- (12) 長谷川公一編、前掲書、45頁

- (13) 小原秀雄監修『環境思想の多様な展開』東海大学出版会、1995年、152～153頁
- (14) Roderick Frazier Nash, *The Right of Nature. A History of Environmental Ethics*, The University of Wisconsin Press, 1989, p.144-145. ロデリック・F・ナッシュ(岡崎洋監修・松尾弘訳)『自然の権利—環境倫理の文明史』TBSブリタニカ、1993年、286～287頁
- (15) 鹿野政直『日本の近代思想』岩波新書、2002年、110頁
- (16) ドブソン編著、前掲訳書、96頁
- (17) Carolyn Merchant, *The Death of Nature. Women, Ecology and the Scientific Revolution*, 1980. キャロリン・マーチャント(団まりな・垂水雄二・樋口祐子訳)『自然の死』工作舎、1985年、12～13頁
- (18) 同訳書、14～15頁
- (19) 上野千鶴子・綿貫礼子『リプロダクティブ・ヘルスと環境—共に生きる世界へ』工作舎、1996年、33頁
- (20) 井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック〔第三版〕』有斐閣、1999年、177頁
- (21) Ariel Salleh, *Ecofeminism as Politics. Nature, Marx and the Postmodern*, Zed Books, 1997, p. 14
- (22) 『女たちの21世紀(No.7)』アジア女性資料センター、1996年、5頁
- (23) 同書、6頁
- (24) 『レヴァイアサン(No.8)』木鐸社、1991年、48～49頁
- (25) 青木やよひ『フェミニズムとエコロジー〔増補新版〕』新評論、1994年、新版への序
- (26) 同書、204～205頁
- (27) Andrew Dobson, *Green Political Thought*, Second edition, Routledge, 1995, p.186. A・ドブソン(松野弘監訳)『緑の政治思想—エコロジズムと社会変革の理論』ミネルヴァ書房、2001年、270頁
- (28) Val Plumwood, *Feminism and the Mastery of Nature*, Routledge, 1993. なお、著者の Plumwood は、以下の文献で環境と政治の論点を整理している。Karen J. Warren (ed.), *Ecological Feminism*, Routledge, 1994, pp. 64-87
- (29) 江原由美子編『フェミニズム論争 70年代から90年代へ』勁草書房、1990年、137頁
- (30) 上野・綿貫、前掲書、224頁
- (31) Carol J. Adams, (ed.), *Ecofeminism and the Sacred*, Continuum Publishing, 1993, pp. 21-22
- (32) 伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子『女性学・男性学』有斐閣、2002年、40頁
- (33) Timothy Doyle and Doug McEachern, *Environment and Politics*, Routledge, 1998, p. 54
- (34) 松井やより編著『20人の男たちと語る性と政治—松井やよりフェミニズム対話集』御茶の水書房、2002年、268頁